◆ しまる会(昭和 40 年入社同期会) IN 軽井沢

・・・・・・（2015-10）—和_原田 憲一さんから投稿頂きました—

今年、しまる会は入社 50 周年を迎え、軽井沢で相変わらずの悟りとは無縁の未熟を愉しむ会を開くことができた。これまで 30 周年は「奥さんも同行のマレーシア」、40 周年は「京都・嵐山」、と時宜をとらえ旅を重ねてきたが、実のところは、東京・名古屋・大阪・（一度福岡）が持ち回り幹事で、毎年旅先でゴルフと観光を楽しんでいる。

昭和４０年入社の世代は、団塊の世代の一歩手前、ともすれば、一つの価値観に向かって「よーい、どん」でひたすら走ってきた輩である。

教育センターが正式に発足した第一期生で、設備・教材も限られたなか、木造二階建て１２畳に６人のたこ部屋で、ここを拠点に現場実習、稲電実習（和電・長電実習）と１年間同じ飯を食った仲間であり、同じ方向を向いて走り続けてきた仲間である。だから今、価値観の多様化と言われても、戸惑いを覚えて当然である。

そんな仲間だからこそ、一年に一回糸を紡いで、よりをかけ長い糸を織りなしているのではないだろうか。

９月３０日コスモスが揺れる晩秋の軽井沢駅。東京、名古屋、大阪、北陸、九州から懐かしい顔ぶれが勢ぞろい。直行組を含め総勢３２名がステラ軽井沢に集合。

ステラ軽井沢　「こころ」は青春だけれども「からだ」は悲鳴を上げている爺さんたち

開会挨拶

「しまる会」寺門幹事の提案でまずは記念写真。

「爺さんたちは酔っぱらうと言うこと聞かねえ～から、先に写真とっとこー。みんな顔が崩れてきてるから、せめて笑顔くらい創っとけや」

さあ、待ちきれんばかりと長島会長の挨拶で宴会の始まり。

「今年もこうして再会できたことは大変喜ばしい。大いに遊び、ますます男の行間を広め輝いていこう」

そして、坂倉大阪支部長の乾杯。

「来年は伊勢志摩サミットや、しまる会サミットはそれを超えてみせるぞー」間髪を入れず、土屋幹事長から 50 周年記念

品の説明。「５０周年の記念品は浅草・浅草寺の千社札で、（しまる会５０周年）が記載された個人の名前入り、しかも健康とボケ封じを祈願されたものですから、ありがたくお受け取り下さい」
さすが、土屋幹事長これだけてはおわりません。
「奥さんのおみやげとして、美智子妃殿下が愛される“あんずの花”、よく訪れられる千曲市のあんずの里で採れた“あんずジャム”を持ち帰りください」
幹事長のこの配慮が「しまる会」のつなぎになっているのは言うまではありません。
さらに、長野支店長からの長野の銘酒「真澄」の差し入れの紹介があり、宴席は一気に佳境に・・・。

乾杯発生

高卒入社も来年は古希、学卒入社は後期高齢者となる。若い子からみたら明らかに爺さんなんですが、本人はまだまだ若いイメージを引きずっている。要は、体の老いに気持ちが追いついていかないわけである。
「最近なんだか、どこかヘンなんだよな。オレ」
「それは、まず下からやってくるだろう」
「やたら、おしっこが近いんだよ」
「イヤー、オレは切れがわるくてね」
よく歳をとると、「歯・目・まら」と言われるが、それに近い順番で体の衰えを感じるようだ。
歯槽膿漏になり、老眼へと突入する。
古希、後期高齢者とは、チョット切ない響きをもつ言葉だが、また別の観点からみれば、今まで自分が体験してきたいろいろな出来事から学び、若いころには決してわからなかった人生そのものの醍醐味を、甘受できる年代になったと言えるのではないかと思う。

懇親風景

だれだって自分の老化なんて認めたくない。「年だから」なんていう言葉は使いたくない。いつだって「こころ」は青春でいたい。でも「からだ」はかなり正直者。
だから時には耳をそばだてて「からだ」からの悲鳴を聞いてあげないといけない。
そして、「楽しい時」を満喫すればいい。
その中でまた、新たな自分との出会いが「大人の喜び」を導いてくれるだろう。
宴席の会話は「からだ」のことばかりだが、お互いを気遣い、思いやる気持ちに溢れていた。
宴も時間超過、来年の再会を約束し、またバカ話できることを願い一本締め・・・。二次会へと流れていった。

一本締め

中軽井沢カントリークラブ　～　軽井沢の薫りに魅せられて

スタート前に記念撮影

ゴルフ組はステラ軽井沢を 6:30 出発。車で約 30 分、旧軽井沢銀座通りはすぐ近くにある中軽井沢カントリークラブへ。雄大な浅間山を前に広がる適度にアップダウンのある林間コース。結構難易度の高いホールが目立ち、確実なショットが求められ、チョット外れれば池ポチャ、バンカーにはまり泥沼へ・・・
昨日の天気予報では、低気圧の影響で曇り時々雨・風強しとのことであったが、さすが「しまる会」は強運の持ち主、予報を吹っ飛ばし見事に快晴でゴルフ日和。
「これじゃあ、言い訳できんけん酒飲まなあかんで!!」
「そや、どうせ優勝は名古屋のＫさんかＯさんや」
「いいじゃんか、オレたちは健康のためのゴルフやんけ」
クラブハウスに着くや否や、レストランで朝食。それぞれテーブルに着き、朝食なのか酒席なのかわからない雰囲気で、声も次第に大きくなる者、コーヒーを飲みながらじっとコースを眺める者とそれぞれである。
「浅間山見事やけど、大丈夫かい」
「ここんとこ、あちこちで火山が噴火しとるけん、なんか地下で起きとるちゃうか」
「そやなぁ、オレの息子が噴火してくれたらいいやんけど」
「あほぬかせ、お前のはもう死火山や!!　噴火することなんかあらへん」
「さみしいなぁー、パターでも練習しとこ」
なんやかんや言いながらも、パターの練習では正気にもどって、もしかしたら、あわよくば今回はオレが・・・。名古屋のＫさんＯさんが、８０切るかどうかの話が出ているのに、もしかしたらもへったくれもない懲りない面々である。
スタートホールのティグランドに「しまる会」ゴルファーが集合。来年は古希、後期高齢者なのに、こうして楽しく語らいながら、、ともにプレーを楽しめる余裕がある。
風景や花木の美しさに目をやるゆとりもある。豊富な人生経験に裏打ちされた落ち着きもある。と言うものもいれば、ドライバーをバットに見立てて、イチローの真似をして。
「こうやって風景を見ると、攻め方と球筋が頭に浮かんでくるんや」
「いつまでたっても、口だけは達者やなぁー」
「なに抜かす。ちゃんとボールの行方みとってやー。最近よく見失うんや、たのむでー」
「見失うもんか、どうせ足元や!　リキまはんなや」
「ゴルフは本性が見えるちゅうけど、ほんまやなぁ」
「ごちゃごちゃ言っとらんと、はよー打ちイヤー」
とめどもない会話をしながら各組はスタート。洋芝のラフと早いグリーンに悩まされる者、
ボールがブッシュや林に入って探し回る者、狙わずとも白杭・黄色杭に吸い込まれる者、
バンカーで砂浴びしてる者。

「お前、鶏とちゃうか」
「出一へんのやー」
「なんで、頭の中まで砂だらけなんよ、よっぽど砂浴びが好きなんや」
「あほー、コロしたるぞー」
さて、後半のハーフも終わりパーティ会場へ。
さあ、結果発表となり会場もざわついてきた。大阪のＳさんがいいとか、九州のＤさんもよかったみたいだ・・・。いや、やっぱり名古屋のＯさんだかも・・・。
ここまではいつものパターン。結果は優勝、名古屋の近藤さん（Ｔ８７）。ベスグロは同じく名古屋の大須賀さん（Ｔ８６）との発表に、会場は「またか」と当然の結果にうなづいた。猛打賞は加藤さん、またゴルフ場からの特別賞（旅行スーツケース）は山守さん、いずれも名古屋で名古屋総ナメのゴルフでした。
「８０台で回るとは相変わらず、すごいやんけ」
「この年になっても、スウィングがちゃうよ。それに、よう飛ばす」
「なんでも、エイジゴルファーを目指してるんやて」
「なんやそれ」
「８０歳になったら、８０以下で回る言うことや」
「そりゃ、バケモンちゃうか、わしゃ元気溌剌ゴルファーや」
「それでいいんや、定年後こそ世の中で一番幸せなゴルファーや」
楽しい会話と雄大な景色を満喫し、来年の再会を約束し、これから帰るグループ、さらにステラでもう一泊し軽井沢観光ののち帰る者、そして来年また「バカ話ができる」ことを楽しみに・・・。そして「笑える日」を楽しみに・・・。

遠くとも一度は詣れ善光寺

観光組はステラにて朝食後８時30分出発、一路善光寺へ。
山深い信濃の善光寺、参詣者は年間数百万人に及ぶと言われています。交通の発達した現在では、それは容易な事ですが、徒歩でしか来ることの出来なかった時代にも、全国各地から険しい山坂を超えてたくさんの人たちの参詣が続いてきた。
しかし、ようやくたどり着いた善光寺で、本堂に入り手を合わせても、ご本尊の姿は見えません。目の前には、ただ金襴のお戸張があるばかりでした。

善光寺　山門（三門）

「善光寺の御本尊は誰が作ったの」
「印度からやってきた最初の仏様だそうな」
「どんな仏様なんだい」
「それは善光寺如来と呼ばれ、阿弥陀三尊像と呼ばれているんだよ」
「ようわからんけど、三人仏様がいるの」
「中央に阿弥陀如来、右に観音菩薩、左に勢至菩薩が台座の上に侍しているんだって」
「なんのご利益があるんだろうね」
「善光寺如来はすべての人々に、極楽往生を約束する仏様だって」
「じゃー、オレも極楽往生へ行けるっていうこと」
「いや、お前は地獄へ落ちて苦しむんじゃないかな」
「オイ、オイおどかすなよ。オレも来世は安楽な極楽にいきてーよ」

「まあ、あの世に行ってみないとわからんが、それを善光寺如来が安楽を間違いなく約してくれるというのだから、ありがたい極みだなぁ」
善光寺に参拝して、この世の罪障消滅して極楽に行けるということで、昔から参道はいつも人波の絶えることがないと言われている所以である。
「じゃ、善光寺に参詣に来ない人は、善光寺如来に極楽に導いてもらえないの?」
「そうでもないよ。仁王門から山門に至る参道の両側に、無数の石造五輪塔が建っていたろ」

善光寺仁王門にて

「そういえば、いっぱいあったなぁ」
「古いものでは、鎌倉時代のものもあるんだって」
「それは、なんの為にあるの」
「善光寺境内は善光寺如来の世界、この世の極楽浄土ととらえ、そこに生前参詣を果たせなかった人の遺骨の一部を埋葬し、五輪塔を建てて後世の安楽を願ったんだよ」
「今もそれは行われているの」
「いや今は、寺への納骨という形で行われているよ。だから、死んだら奥さんに、骨を善光寺へ納骨してくれと頼んどいたほうがいいよ」
「いまさら優しくしても遅いかなぁ。頼みを聞いてもらえるよう、言うこと聞いとこ」
「ところで、牛にひかれて善光寺詣りという言葉をしってるだろ。どういう意味か知ってる?」
「いや、よくは知らんけど」
「昔、信濃の国に強欲で信心が薄く、善光寺に一度もお詣りに来たことのないお婆さんが住んでいたそうな。ある日、川で布をさらしていたところ、どこからか一頭の牛が現れ、角に布を引っかけて走り出したそうな。そこで慌てた婆さんは、布を取り戻そうと、その牛の後を一生懸命追いかけたんだよ。そして、気が付いてみるとそこは善光寺。
牛の姿はなく、角に引っかけられたはずの布は、如来の厨子の前にありました。実は、布をさらった牛は、善光寺如来の化身だったんだ。
そのことに気付いた婆さんは、自分の不信心を悔い、善光寺如来に手を合わせ、以来信心深くなって、善光寺にもたびたび訪れ、極楽往生をとげたそうな」
「オレもこれまでの悪行の数々を悔い改め、今度はかみさんと一緒にお詣りにくるよ」
神妙な面持ちで参詣を済ませ、門前の蕎麦屋で信州そばと日本酒を楽しみ、それぞれ、奥さんへのお土産を買い、一路自宅へ帰るものと、ステラ延泊組とにわかれ、来年の再会を約し名残を惜しんだ。